

# 御幸町だより

No.149 2022年11月27日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る  
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

## 『ベツレヘム』

(ヨハネ6:48~59)

牧師 村島 義也

「ああベツレヘムよ」(讚美歌 267)、心にしみるクリスマスキャロルの一つだ。作詞者はフィリップス・ブルックス~1893年に58歳で天に召されたアメリカ聖公会の牧師、著名な説教家。活躍は教区や教派を超えるものだった。母校のハーバード大学には彼を記念するフィリップス・ブルックス・ホールがある。日本にも来られたそうで、こんなエピソードが伝わっている~「彼が乗ったら馬車が壊れた」。というのもブルックス先生は身長2メートル、体重150キロの巨漢だった。生涯独身だったが子どもと遊ぶのが大好きで、子どもたちも彼のことが大好きだった。大きなブルックス先生が体を揺らして子どもたちと遊ぶ様子を想像すると、私はオスカー・ワイルドの『わがままな大男』のお話を思い出す(勝手なイメージだが)。ブルックス氏が天に召された時のこと。このごろ先生に会えないと淋しがっていた5歳の少女に親がそのことを告げたところ、彼女は即座に言ったそうだ、「それなら天使たちが喜んでいてでしょうね」。

「わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか」。人々は〈先祖が荒野でマンナを食べた〉ことを引き合いに、信ずるに足る「しるし」をイエスに求めた。

それに対し、イエスは言われた、「モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」(32

~33)。そしてこう言われた、「わたしが命のパンである」(35)、「わたしは、天から降って来た生きたパンである」「わたしが与えるパンとは、世を生きさせるためのわたしの肉のことである」(51)。「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と人々が訝しんだこれらの主の言葉は、今や聖餐をしろとする礼拝に生きる私たちには明らかであろう(53~58、Iコリ11:23~25)。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました」(Iヨハネ4:9)。真に神の独り子・キリストは、世に与えられたこの上ない神の愛の賜物、人を生かす命のパンなのだった。

ベツレヘム。イエスがお生まれの当時、ダビデ所縁の輝きは遠に色褪せた世界の片隅の鄙びた寒村に過ぎない。しかしあの時、預言の言葉が生起した~「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである」(マタイ2:6)。ベツレヘムはヘブル語で「パンの家」の意。まさにあの星降る夜、ベツレヘムは天から降る命のパンを抱くのだった。やがて豊かに膨らみ、全世界に分け与えられる福音のパン。

アドヴェントの日々、あの讚美歌の歌詞を心の祈りとしたい。「ああベツレヘムのきよきみ子よ、今しもわれらにくだりたまえ。」(讚美歌 I-115 番4節)。